

大相撲 2025 九州場所を顧みて

11月9日から23日まで福岡国際センターで開催されていた2025年大相撲九州場所の観戦記を綴って“速報”としてお送りしたいと思っていたのですが、普段はヒマな私が多忙な身になったために、大幅に千秋楽後1のはか月後まで出稿が遅くなってしまいました。“速報”どころか大変な“遅報”になってしまいましたので、「“遅報”になってしまった奴の“痴呆”的なせいだ」などと薄ら笑いを浮かべられる向きもおられると思いますが、4回出稿分を以下のようにまとめてお送りしますので、どうぞ軽くお目通しの上ご異論やご反論をお送りくださいようお願いします。

(その1) 初日は NHK の不戦敗

あれれ、テレビ棧敷で相撲が見られない

初日くらいはきちんとテレビ観戦しなくてはと思って、他の要件を手早く片付けてテレビ棧敷に陣取ってテレビをスイッチ・オン。しかし、画面には相撲の様子が全くなく、地震情報らしきものが“まつたり”と流されているだけ。はては「選局を間違えたか」と思ってNHK第2やBS1-2にチャネル変更してみたのですが、いずれも所定の番組が放送されているだけでした。ようやく、「どうか、地震情報を送るために相撲放送は中止された上にサブチャンネルへの移行もされていないんだ」と気付いたのは10分間も後のことでした。

“まつたり”調で、まったく切迫感の無い地震放送

11月9日当日は西幕内後半の取組に入った午後5時3分に、東北地方で三陸沖を震源地とする震度4の地震が発生し、岩手県海岸には1メートルの津波予想が出たために大相撲中継は中断となり、地震に関連した情報が放送されることになったのだと後になって知りました。地震に関連した情報の流し方が、映像・音声とも「ゆったりと落ち着いた気分である様子」を示す“まつたり”調で、まったく切迫感の無いものでしたので、「これで防災効果を上げることができるのかな」と疑問を持ちました。津波が押し寄せる可能性のある地域とそれぞの地域への到達時刻と予測される津波の波高などを知らせてもらえなければ、緊急放送もまるで役に立たないものになってしまうというのに。

“災害にさらされそうな国民”に向けての実践的な警告放送を

「NHKでは、災害の予防と減災に役立つ放送を行い、国民の命と暮らしを守るという公共放送の使命を達成するため、地震や豪雨などの緊急・災害報道にあたっては原則として全国放送番組でマルチ編成は行っておりません」などと偉そうに言ってましたけど、あのような“まつたり調の緊急・災害報道”で一体何人の“国民の命と暮らしを守る”ができたのでしょうか。“国民の命と暮らしを守る”といったような優等生言語を用いている場合ではなくて、“災害にさらされそうな国民”に向けて災害の波及の予測を伝え、対応体制を整えることを切実に訴えるべきところだったのではないかと思います。緊急・災害報道は決して“全国放送番組”で行う必要がありません。起きた地震の波及効果の予測を担当する官公庁の「地震調査研究推進本部(地震本部)」が発する津波が押し寄せると予測される地域に押し寄せる津波の到来時刻と津波の高さに関するデータと必要な防止策をそれぞれの地域局に伝え、大相撲放送の上に載せて地域局緊急発信放送を送ることこそがNHKのるべき姿勢だったのではないかと思います。

一見民主主義的でその実独裁的な NHK の意思決定スタイル

今回の大相撲中継中止は福地 NHK 会長恩自らが理事たちに考えを伝え、これに反対する理事はいなかったとのことでした。一見民主主義的な意思決定スタイルのように思えますが、実はとんでもない独裁制がNHKで罷り通っているように思えました。緊急・災害報道について 1 回も熟慮したことのない福地 NHK 会長の一言に、これまた緊急・災害報道について 1 回も熟慮したことがない理事諸氏が一言もなく賛同してしまっているのですから恐ろしいことです。まるで経済体制について無知蒙昧であるにもかかわらず、“制裁”と称して高率関税をかけまわすトランプ大統領と同じ愚鈍な意思決定がNHKで行われていたとは意外なことでした。

いつでも稼働できる災害防止放送体制を

私たち日本人は、「どんな仕事にも後工程はある。後工程はお客様であり、顧客満足感を得るところから組織の利益が生まれ、そこで働く者の幸福感が感じられる」という旨教わってきました。この伝で行けば、NHK にとっては放送の視聴者こそが顧客であり、その満足度を高めることに仕事の重点がおかなければなりません。今回の大相撲初日の放送中止措置については、どれくらいの数の視聴者が満足して、どれくらいの数の視聴者が大相撲初日の放送中止措置によって不満感を抱いたのでしょうか。NHK には、「国民の命と暮らしを守るという公共放送の使命」などと実効力の無い念仏を唱えていないで、いつでも稼働できる災害防止放送体制を整えておくよう望んでやみません。

(その2) 大の里独走状態だった序盤戦

名横綱・北の湖以来の“根こそぎ”のエネルギー”

さて、九州場所の序盤戦で 9 連勝した大の里について、スポーツ報知評論家をされている元大関の琴風さんが「久しぶりに“根こそぎ”という言葉を思い出した。常識をはるかに超えた“馬力”だ。名横綱・北の湖さんも馬力で圧倒したが、それに匹敵する迫力かもしれない。」と評論されていましたが、まさに“仰る通り”的の一言でしたね。そして、“馬力”こそが、高校時代に物理で習った「物体の運動エネルギー」なのではないかと私の妄念は広がってきました。物体の運動エネルギーは、「物体の質量と速さの二乗に比例する」、つまり、「速度 v で運動する質量 m の物体のエネルギー K は $K=1/2 mv^2$ で与えられる」という公式を思い起こしたからです。

見渡せば高体重の肥満症ばかりなり

そして、幕内力士 34 名中で体重(質量 m)が第 2 位の 192kg の横綱・大の里が土俵上で“根こそぎ”的な活躍を示せるのは、肩・手足及び腰・膝周りの強力な筋肉が“根こそぎトップ”的な速度 v で動けることを示すものでしょうし、一方、体重(質量 m)が第 1 位の 192kg の熱海富士(前頭 1 枚目・熱海出身)と第 3 位の湘南乃海(前頭 5 枚目・大磯出身)の相模湾西海岸沿い出身コンビの二人がさしたる活躍をすこしがんばるだけでは、速度 v を生み出す筋肉が乏しいからだと言いたいと思います。大関の琴櫻も同様で、以前から「あんなに豊かな乳房も贅肉と同じようなもの。」と思っていたのですが、やはり、「贅肉だらけの体では体重(m)が増加するだけで、速度 v は逆に下がってしまう」というのが正解だったようですね。

「贅肉」は「筋肉」に非ずなのだ

ちょいと A I で調べてみたところ、「贅肉」と「筋肉」は全く違うものなんだと諭されました。「贅肉」と呼ばれるものの正体は、皮下脂肪と内臓脂肪がこれに当たるものでほとんどが体脂肪なんだとか。「贅肉は脂肪の塊」というのが事実だったわけですね。一方、「筋肉」は体を動かしたり、姿勢を保ったりするのに必要な組織ですから、「筋肉」が「体を動かす源」だというわけですね。更に言えば、体を動かす力の源となる筋肉は「骨格筋」で、これが骨に付着していて、私たちの意思で動かせる筋肉のことなんだそうです。質感は「贅肉」が「やわらかい、たるむ」で、「筋肉」は「かたい、引き締まる」ですから、大相撲の土俵で大方の力士が見せてくれるブヨブヨの体は「筋骨隆々」ではなくて実は「贅肉ポヨポヨ」の姿だったんですねえ。

大相撲の土俵に目立つ絆創膏姿

思えば、大相撲は土俵に登場してくる力士のほとんどが絆創膏をしていますね。「おっ、この力士は絆創膏をしていないな」と思った力士も小さく包帯をしていたりして。こんな、他のスポーツでは決して見られない怪我人主体の姿をさらしているのも、思えば「贅肉ポヨポヨ」の力士が圧倒的に多くて、それで敵の素早く力強い動きに対応するために訓練不十分な我が筋肉に無理をさせてしまうから怪我を負うことになってしまふからなのではないかと思います。「一生懸命与えられた稽古量をこなして体を大きくしていけば良い」という指導法しかとりいれてこなかったことが、絆創膏・包帯姿の目立つ大相撲の姿を現出させてしまっているのではないかでしょうか。

照ノ富士の復活の姿を見習ってほしい

先代の照ノ富士の場合は、2021 年 5 月場所に大関に復帰した時に、2015 年に大関から陥落する以前には見られなかつた“新しい力”を身に着けていました。膝の治癒に励みながら腕力や体幹の強化などのための筋肉トレーニングを積んでいたわけですね。照ノ富士は序二段にまで転落していた時には 90 キロにも及ばなかつたベンチプレスが、精一杯筋トレの努力を続けた結果 250 キロ上げができるようになっていたのです。その結果、大関復帰後横綱昇進時(2021 年)と最初の大関昇進時(2015 年)のベスト 4 連続場所の成績を対比してみると、大関復帰後の方が遥かに優れたものになっています。明らかに”新しい力”が身についていたからこそ、ごつくて守りも強い「自分の相撲」を確立して無敵状態で連覇して横綱に昇進していったのだと思います。

日本相撲協会も技術指導体制の整備を

そのうえ、学生相撲の時代から筋肉トレーニングに熱心で、ベンチプレス 220~230kg を挙げるという、照ノ富士と同じ伊勢ヶ浜部屋の尊富士が 2024 年の大相撲 3 月春場所で新入幕初優勝という離れ業を演じました。これは、伊勢ヶ浜部屋へ伊勢ヶ浜部屋へという出稽古の流れができて、筋肉トレーニングに力を入れ“馬力”を身に着ける力士が多くなるぞと期待していたのですが、そうした革新的な流れはなかつたようですね。私は、東芝を出てから日本語の教師になろうと思って日本語教育の勉強をしました。そこでしみじみと分かったことは、「自分が日本語を話せても他人に日本語を教えることはできない」ということでした。大相撲界にも「自分が相撲を取れても他人に相撲を教えることはできない親方衆が圧倒的に多い」のではないでしょうか。NHK 経営幹部と全く同じで、日本相撲協会も八角理事長をはじめ各役員とも顧客満足度に無頓着ですが、せめて技術指導研究会でも設けて、その卒業生だけを親方として遇するよ

うにするようにしてもらえないものでしょうか。

(その3) 日本人横綱独走の筈が外国人同士の優勝決定戦に

義の富士が流れを変えた

中日を越えた時点で評論家の元大関の琴風さんは「誰が大の里を止めるのかと考えても答えは見つからない。体当たり、かち上げ、もろ手と立ち合いにもバリエーションがある。相手を見て立つこともできるから変化にも対応できる。死角は見当たらない。かすかに思い浮かぶのが義ノ富士。あの柔らかい体で懷に入ったらどんな風景が広がるのか楽しみだ。」と述べていました。さすが琴風さんですねえ、対戦相手を“根こそぎ”的形で破り全勝街道を突っ走ってきた大の里を義ノ富士が“根こそぎ”的形で破ってしまったんですから。確かに、義ノ富士に改名する前の草津は馬力がある力士だと思っていたのですが、幕内力士 42 名中で身長が 183cm の 26 位、体重も 153kg の 25 位で、体重が第 2 位の 192kg でいかにも小型な義ノ富士が大の里を一気に押し出してしまうとは思ってもいないことでした。

白鵬の弟子として紆余曲折を辿って昇進してきた義の富士

日大出身の義ノ富士と日体大出身の大の里とは学生時代に 3 度対戦し、義ノ富士は 1 勝 2 敗と負け越しておらず、この九州場所 10 日目の対戦がプロでの初顔合わせだったのだそうですね。デビューはともに昨年 5 月場所。大の里は幕下付出 10 枚目格、義ノ富士は同 60 枚目格で初土俵。あつという間に出世街道を駆け上がったライバルに対し、義ノ富士は一步一步、幕内への階段を上ってきたのですね。「退職した白鵬の弟子として宮城野部屋に入門したところが、師弟の不祥事で部屋が閉鎖。彼らの預け先の伊勢ヶ浜部屋に入転籍することになってしまった。当時の伊勢ヶ浜部屋は大所帯になったばかりで、何をするにもてんやわんや。義ノ富士も雑用やら付け人業やらに追われ、相撲に集中できなかった。それでも十両を 2 場所で通過したように、地位が上がって雑用から解放されるや水を得た魚。もともと大の里と並んで『将来の横綱大関候補』と言われていた逸材ですからね」とベテラン親方は語っています。

大の里の後半 6 日間は 2 勝 4 敗という惨状に

しかし、遅れてのし上がってきたとはいえた前頭 5 枚目の相手に横綱の自分が屈するわけがないと思っていた大の里にとっては、義ノ富士の速攻は「俺を忘れるなよ！」という痛烈なメッセージになったに違いありません。明らかに 9 日目まで全勝で通してきた時の“根こそぎ”感は影を潜め、続く 11 日目に高の勝、14 日には琴櫻に敗れ、ついには優勝決定戦進出の望みのかかった千秋楽の豊昇龍との横綱対決も負傷欠場してしまって、前半 9 日間 9 戦全勝に対して後半 6 日間は 2 勝 4 敗という惨状を示すことになってしまいました。初日のNHKの不戦敗で始まった秋場所が、千秋楽の横綱の不戦敗で幕を閉じるのも妙な形ですが、大の里の負傷欠場は 13 日目の安青錦戦で受けた怪我「左肩鎖関節脱臼」によるものですが、どうもここにまで義ノ富士の影響が後を引いていたような気がします。

初の中小型外国人同士の優勝決定戦

いずれにしても、“根こそぎ”街道をまっしぐらに進む日本人横綱・大の里の手中に収まるものとばかり思っていた九州場所の賜杯の行方が、場面が急転して、モンゴル人横綱・豊昇龍とウクライナ出身の新関脇・安青錦との優勝決定戦次第ということになってきたのですから驚きでしたね。過去にも外国人同士による優勝決定戦は例があるのですが、今回は身長 188cm で幕内 42 力士中 11 位でいながら体重 149kg で 27 位の豊昇龍と、身長 182cm で幕内 42 力士中 29 位で体重 140kg で 34 位の安青錦との中小型外国人同士の優勝決定戦は史上初のものでした。

た。結果は、安青錦がどちらが横綱かわからないほど圧倒的な取り口で豊昇龍を破りましたね。豊昇龍も九州場所は筋力トレーニングに励んできたせいか、随所で、強化された足腰から生まれる鋭く力強い出足を利した寄り身を見せたり、肩肘が発する投げ技を振るったりしていたのですが、安青錦はものともせず 3 連勝して豊昇龍の苦手力士になりあがつてしまつたのですから大したものです。

(その4) 相撲を柔道に次ぐ国際的スポーツに

外国人力士の強さの所以

安青錦関は 2025 年九州場所で初優勝を飾った後、大関への昇進が決定しましたが、これは年 6 場所制が定着した 1958 年以降の力士(付け出しを除く)で、琴欧洲(ブルガリア)の 19 場所を抜いて最速の大関昇進記録を樹立しました。しかし、どうして安青錦や琴欧洲はこのような早い昇進ができたのでしょうか。元小結の臥牙丸さん(ジョージア出身)は、「大好きな大相撲と日本の魅力を世界に発信したい」ということで自ら興した YouTube「ガガちゃんねる」で、安青錦がレスリング経験を相撲に生かしていることについて「相撲に合うのはモンゴル相撲だけじゃない。柔道の投げ技も有効だが、レスリングの有効度が高い。特にレスリングの投げは(相手の下に)もぐってからの投げなので相手が抗しきれない」という旨述べていました。琴欧洲にても元大関の把瑠都(エストニア出身)にしても、「体が大きかったから昇進した」のではなくて、それぞれバスケットボールと柔道に邁進する過程で鍛えぬいた体幹と骨格筋の強さを相撲に活かしたからこそ力士として成長したのだと思います。

柔道に続いて相撲の国際競技化の動き

現在、幕内には、豊昇龍、霧島、玉鷲、欧勝馬、阿武剣、千代翔馬の 6 名のモンゴル勢、安青錦、獅子の 2 名のウクライナ勢、それにカザフスタン勢(金峰山)、ロシア勢(狼雅)各 1 名の計 10 名の外国人力士がいます。この他に、かつての琴欧洲、把瑠都、臥牙丸等々の東欧勢の他に、曙、武藏丸、小錦、高見山などのハワイ勢もいたのですから、今回の安青錦の大関昇進によって広く海外からの新規力士数急拡大の傾向が顕著になってくることが予想されます。どうですか、繰り返し世界相撲大会白鵬杯を開催し続けてこられた白鵬さんの相撲の国際競技化の動きと局面が近くなってきたように思われませんか。現役時代に史上最多 45 回の優勝を果たした偉業を携えて、第二の人生では「相撲を通じて世界をひとつにする」という理念のもと、社会貢献と相撲を世界に広げる活動を積極的に展開していく、この数か月の間にも、タイ、モンゴル、韓国、カザフスタン、ウズベキスタン、エストニアなどを訪問し、現地の相撲関係者との交流を重ねてきているのですよ。

日本相撲協会は要改革の時

かつて日本相撲協会は、部屋の兄弟子が若手力士に対して暴行やいじめを行ったということについて、元白鵬が親方を務める宮城野部屋を取り壊し宮城野親方を伊勢ヶ浜部屋預かりするという処置を取りましたね。通常の企業であれば、部下が非行を起こしたからと言ってその部門を廃絶して部門長を罷免するようなことは決して致しません。日本相撲協会は実にひどくデタラメなことをするものだと思いましたよ、せめて「厳重戒告」というステップを設けるべきだったと思います。思えば、八角理事長をはじめとする日本相撲協会のご歴々は、それぞれ“優秀な相撲取り”であったばかりで、組織運営の経験は一つもないですから仕方の無いところかもしれません。四股、鉄砲、すり足といった昔ながらの基本動作を「一生懸命稽古」して、その多くが贅肉づくりにしか役立たない「ちゃんこ鍋をたらふく食べる」ことだけを守り続けてきたのですから、日本の相撲の力が衰えてきたのも無理のないところだ

ったのかもしれません。日本相撲協会は要改革の時。組織運営の力のある経営実業担当者陣に経営の座を譲るべき時が来たようです。

世界相撲のために轡並べて

年寄り衆は、それぞれ前述の技術指導工程を受講した上で、それぞれの部屋で後輩の指導に当たる傍らで、自らの出身地に赴いて少年相撲界を時折訪れて、大の里や義の富士の跡を継ぐような少年相撲会のつわものを育てるだけでなく、白鵬さんが進められてきた子供のための相撲大会「白鵬杯」、そしてそのうえに築くべく構想されている「世界相撲グランドスラム」への参加者に技術指導を行って後の日本大相撲入りの道を切り開く役を担うようになったら、日本を頂点とする世界相撲のレベルは向上大幅に向上するものと思えます。日本相撲協会が、白鵬さんが理念として掲げてきた「相撲を通じて、世界を絆で結び、希望と幸せを届ける」ことに協賛できる立場に立つことができますように。人生末期にある私たちにも日本相撲の明るい明日があるところを見せてほしいものだと思っています。

以上

「自分の相撲」を確立して無敵状態で連覇して 横綱に昇進していったのだと思います。

馬力は仕事率の単位であり、「ある重さの物体を、どれだけの時間で、どれだけの距離を動かしたか」を示します。